世界の街角から Vol.56

Uruguay

コロニア・デル・サクラメント

廣松 悟

私は、2013年度前期在外研究として、長期の研究テーマである新大陸都市研究の一環で、南アメリカ大陸における都市を中心とした比較地誌学上の調査に従事しました。具体的には、長年の友人もおり、都市関係研究機関とのコンタクトもあるアルゼンチン首都の大都市ブエノスアイレスを拠点としたうえで、ウルグアイ、パラグアイ等のいわゆるパラナ川流域諸国に点在する諸都市や周辺農村部の日系入植地に直接出向き、現地関係者へのヒアリング調査を試みるかたわら、さらにアンデスを越えて西隣に位置するTPP原加盟国チリの一極集中都市サンティアゴも訪れ、その背景調査なども行った次第です。

専門に関わるそうした調査はひとまず置くとして、ここでは、都市研究において最近私が関心を抱いている「要塞都市（fort-city）」に関連し、今回の調査行でたまたま立ち寄ったウルグアイの「コロニア・デル・サクラメント」について少しだけ紹介したいと思います。近代史などの歴史専門でもなく、軍事オタクでも全くないこの私ですが、南北新大陸をはじめ世界各地に点在する要塞都市は、昔大学院時代に留学していたカナダ東部の典型的なそれであ

旧市街の街並み

Satoru Hiromatsu profile

政治経済学部教授

経済地理学・都市を中心とした比較地誌学
1959年、福岡県生まれ
三重大学人文学部専任講師・助教授を経て1995年より現職

主な著書・論文

1998b, A City That Once Worked Well: An Attempt of New Urban Regional Geography (Part I & II) *The Bulletin of the Institute of Social Sciences*、*Meiji University, Vol. 21/2*
ほか

主な所属学会

日本地理学会、Canadian Association of Geographers　ほか

るケベック市を訪れて以来、ずっと興味をそそられる存在でした。

その理由を一言で述べるのは必ずしも簡単ではないのですが、あえて申し上げるとすれば、近代社会における萌芽的な「定集住」形態である原・近代都市（proto-modern city）の一つの形態としての要塞都市の往時のありさまに思いをはせることは、都市を激動する歴史的現実態としての「生きた」存在として追体験するきっかけになる、と現在の私自身が考えているからかもしれません。

旧市街の中の廃墟

さて、コロニア・デル・サクラメント（Colonia del Sacramento）は、先に述べたタンゴとサッカー、美味しい赤ワイン・ビーフとガウチョの伝統でも世界的に有名な、アルゼンチンの首都・ブエノスアイレス特別市からみて、アプラタ・エスチュアリー（沈降三角州）を挟んでフェリーで2時間ほどの対岸に位置する隣国ウルグアイ南西部コロニア県の政庁所在地で、人口わずか2万人あまりの地方小都市です。

17世紀後半、属領化したブラジルから南下を続けた入植ポルトガル人らの手によって、当時はペルー副王領の辺境であった対岸のイスパニア植民地に対峙すべき属領南端部の拠点要塞として建設されました。その後、18世紀に続いたスペイン・ポルトガル間の植民地争奪戦でこの都市の帰属は両国間で目まぐるしく変わることを余儀なくされたようですが、このため、わずか12ヘクタールの旧市街部は、必然的にスペインとポルトガルの建築スタイルが混在する独特の近代都市景観を示すことになりました。このため近年では、かのユネスコ世界歴史遺産に登録されています。これはのちにブラジルの属領から独立した農業国ウルグアイでは唯一の登録世界歴史遺産です。

それにしても、同じ18世紀中葉に北米セント・ローレンス・エスチュアリーで繰り広げられた18世紀英仏植民地争奪戦（いわゆるフレンチ・インディアン〜七年戦争）で決定的に重要な位置にあり、世界遺産登録の点でも先んじていたカナダのケベック砦（現・ケベック州首府のあるケベック市）との地理的な立地特性や歴史的背景を含めた様々な類似性には、改めて驚かされます。

この著名なケベック・シティと比べると、遥かに小規模で、ワールド・ツーリズムの影響もそんなには受けていない現在のコロニアは、それゆえになお一層歴史の往時をしのぶ要素をふんだんに持ち合わせています。

城門と城壁の一部。右端には砲台の一部も

イベロ・コロニアリズムの色濃く残る石畳の回廊をゆっくりと散策中の私は、かの北米要塞都市とともに、子供のころ「探検」して回ったふるさと筑紫山地のそれや、残してきた妻子の暮らす信州真田あたりの山城群など、この街とは地球の真裏（いわゆる対蹠点）にあたる日本の中山間地域に点在する山城の数々などをも、多少のホームシック気分も手伝って、同時に想い返しておりました。